

## 健康ワイド

新ワーク（朝）

## 入院平均84日

「全国心臓病の子供を守る会北海道支部」（小田隆支部長、会員約二百五十人）が、札幌の大学病院などに子供が入院したところのある地方の会員を対象にアンケートを行ったところ、平均入院日数は八十四日に達し、付き添う親の負担が大きいことが明らかになった。

心臓病の子供を守る会

## 地方会員アンケート

認められておらず、親は昼間の面会時間いっぱい付き添い、親せきの家やリネスホテルに泊まるしかない。アンケートには食事、睡眠、入浴、洗濯などが自由にできないと答えた人も多く、金銭的な負担も大きい。肉体的、精神的な負担も大きい。

## 心身の負担も大きく

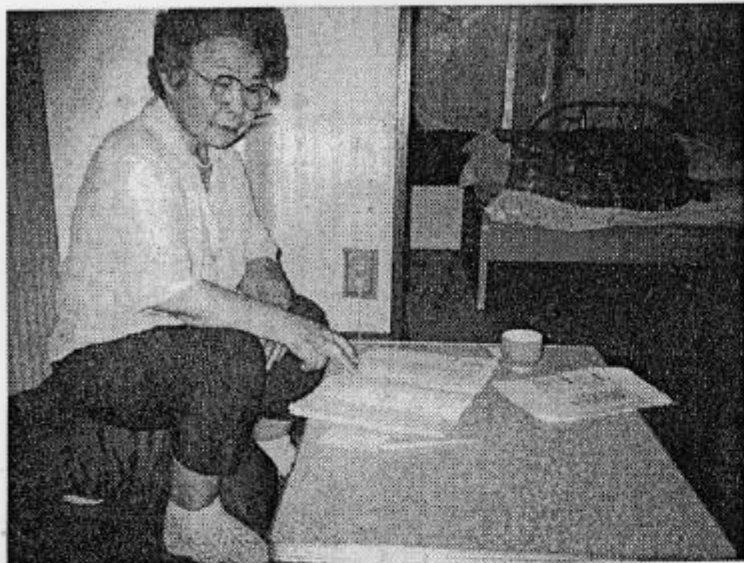
## 入院時に低料金で宿提供

## 広がる「ファミリーハウス」

難病や事故などで病院に長期入院する患者の家族のために、低料金で宿泊施設を提供する「ファミリーハウス」が札幌、旭川などで広がり始めた。アパート所有者が空き部屋を開放する方法が中心で、札幌では運営の団体づくりも始まっている。

網走管内の酪農家Aさんは、昨年十一月、札幌市内の大学に通う息子（三）が交通事故で重体になったという知らせを聞き、急いで市内内の病院に駆けつけた。翌日以降も危険な状態

## 札幌では組織化の動き



に滞在し、そのための費用が治療費とは別に二十万円もかかった。Aさんは当時を振り返り「ホテルはたかだかに帰るだけ。おまけに外食が続き体調を崩してしまっ」と付添家族の負担の大きさを語る。

こうした地方の患者家族が宿泊するための施設が「ファミリーハウス」だ。もともと、がんや心臓病など重い病気を抱える子供の親を支援する運動として始まり、NPOの「ファミリーハウス」（東京）は都内に八箇所、札幌市のアパート経営、安藤妙子さんもその一人。一九八九年に脳梗塞（こうそく）で入院した夫に付き添ったところ、病室の床に毛布一枚を敷いただけで

が続き、Aさんは病室の待合室に待機、夜は近くのビジネスホテルで過ごした。

結局、息子が意識を回復したのは十日後。Aさんはその後も二週間ほど札幌に滞在し、そのための費用が治療費とは別に二十万円もかかった。Aさんは当時を振り返り「ホテルはたかだかに帰るだけ。おまけに外食が続き体調を崩してしまっ」と付添家族の負担の大きさを語る。

道内では小児がんの治療に関係の深い北海道がんセンター（札幌）が、一泊千円から千円の個室で、宿泊日数に制限がない。備え付けの家具や炊事道具があり、患者のプライバシーが保たれるのも特徴だ。

安藤さんのように既に部屋を開放しているところは少ないが、提供を予定している宿泊施設は札幌、小樽など十八カ所以上上っている。

旭川赤十字病院から近いマンションの一室を患者家族に開放している。ほかにも旭川医大の近くに住民二人が自宅の一部を提供することを決めている。いずれも喜多さんが怒

何日間も寝泊まりし、自分も体調を崩した。シンボに参加して、この時の経験を思い出して、国立札幌病院（白石区）の近くに所有するアパートの二室を開放することを思い立った。

同病院などに申しを置いてもらい、昨年五月から既に三泊利用した。安藤さんは「病気が治った、と言って帰って行く親たちを見るのがなによりうれい」といい、患者の家族が気持ちよく過ごせるよう毎日、アパートを訪れては部屋の周りに植えた花の世話をしている。

旭川では道庁管轄バンク推進協会旭川支部長の喜多麻晃（のぶあき）さん（五七）が旭川赤十字病院から近いマンションの一室を患者家族に開放している。

同協会は現在、患者のプライバシー保護や運営スタッフの連絡方法など利用のためのルールづくりを進めており、秋にも運営組織の発起人会を開く予定だ。

事務局役の松宮和男・同協会札幌支部長（五七）は「ファミリーハウスの保つ個室のほかにも、広い共用スペースがあれば親同士が交流することも可能だ。寮などを開放してくれる企業があればいいのだが」とさらに協力を呼びかけている。

また、室蘭では日鋼記念病院が今夏、道内で初めて「慢性疾患児家族宿泊施設」事業の補助を受け院内に家族のための宿泊施設（五部屋）を開設した。

口（011-666-2711）だ。